

に近いものがあつた。この日のことで覚えているのは主治医と長時間話したこと、乳房の再建を担当してくれる形成外科のドクターと長時間話したこと、会計でお金を払つたことの3場面。だが内容はほとんど覚えていない。そして次の場面は家のソ

時標

「若尾さん、残念ながら間違いなく乳がんです」。8月の暑い日、後に主治医となるドクターから告げられたこの瞬間から、わたしと「がん」との付き合いが始まった。勉強し準備してから、がんになつたわけではない。告知は当時のわたしにとって死の宣告

「うーん、こゝ、どうも、
フアーに座つていて、外は暗
くなつていたことだ。当然、
告知の内容や乳房再建を含む
術式の名称など全くわからな
かつた。ただただ恐ろしさで
いっぱいだつた。

「あれれなし死にな
がるような病気なのに、詳
いことが全くわかつてない」。
正確な判断材料がないまま不
安だけが勝手に膨らむ。その
後の診察でも、理解の早い良
い患者を装いたくて主治医に
詳しい説明を求めることがで
きず、情報の海に溺れながら
手術を迎えた。手術をすれば
終わり、と思っていたことが
間違っているなんて思いもし
なかつた。

記録を通じ、がんと向き合う



若尾 直子
がんフォーラム
山梨理事長

つたらあれほど混乱する」ばかりはなかつたかもしれない。今、「チーム医療」という概念が普通に言われるようになつた。よくあるイメージとしては、手をつなぐ医療者の輪の中で患者が笑つて立つている。でもそれは違う。患者もチームの一員として医療者來のチーム医療だと思う。

患者は自分に行われている医療の中身を理解し、参画しなければ自分自身が納得でき

る結果にならないのではないか。そのためにはより正確な記録が必要となる。

山梨県は今年、がんと診断された患者向けの療養生活手帳「わたしの手帳」を作製した。胃、大腸、肺、乳房、肝臓と、がんの部位に応じて5種類つくり、治療計画や記録、病状などを書き込めるようにになっているのが特徴だ。

手帳の作製は、2年前に知事宛てに必要性を訴える要望書を提出したのがきっかけだった。私が理事長を務めるNPO法人「がんフォーラム山梨」が編集の委託を受けたので、患者の視点で内容を練り、民間の利点を生かして企業や団体、個人に声をかけ、予算を増やした。そして医療者が協働し、教育や報道の関係機関が協力してくれた。

まさに七位一体の協働（患

者を含む県民、行政、議会、企業、医療者、教育、報道が同じ目的のために動くこと)が実現した。やつと患者が医療に参画し、医療者とのコミュニケーションをとるための準備ができたことになる。次はより良くすることだ。

情報は用意しただけでは何の役にも立たない。必要な人に必要な時に、必要とされる形で届かなければ、ないのと同じ。わたしの手帳も作っただけでは製作側の自己満足にしかならない。必要とする人は自ら手を伸ばしてほしい。手帳はがん治療を行っている病院やがん相談のできる窓口に用意してある。自分の治療や療養と向き合い、記録することで医療者とのコミュニケーションを充実させ、より納得した療養生活を築き上げてほしい。

わかお・なおこさん 1954年身延町（旧中富町）生まれ。金沢大薬学部卒。薬剤師。NPO法人がんフォーラム山梨理事長のほか、がん患者の団体「川梨まんまくらぶ」の代表も務める。